

貨幣について

安原米四郎

はしがき

私は学校を出て社会生活を始めてから四十余年になるが、その大部分を金融関係の仕事で終始した。今年の七月今まで勤めていた仕事をやめ、この横浜商科大学の教授が今後の私の余生の中心の仕事となった。そこで私はこれを機会に改めて金融の勉強を仕直し、貨幣、通貨（お金）、金融というものがなぜ人間社会に作り出され、そうして人間社会にどのような働きをし、どのような影響を与えたか、また今日与えているかをできるだけ正しく認識し、それができるだけ多くの方々に知って貰うことにしようと思決意した。（もっとも私の微力、私の年令で、それがどこまでできるか甚だ心許なく思っているが、最後まで頑張ってみるつもりである。）

その研究の第一号として発表の機会を与えて下さった本誌ならびに本誌の関係者に対し心からお礼を申しあげる。なお勉強にとりかかってまず感じたことは、今までに発表された学者の論文の大部分は一般の読者にとってむずかしい文章であるということである。

M大学のM教授の「貨幣経済論」は副題として「貨幣経済と労働者階級」と書いてあり、比較的やさしい方であるが、その緒論に次のように書いてある。

「人類がその存続のために労働し、その果実を消費することを絶対的、不可欠な、超歴史的な要件とする限り、使用価値と使用価値そのものを生み出す労働とは歴史的規定性を持たない。富の歴史的規定性は生産力の一定の発展段階によって決定づけられる労働の社会的関係との関連の中においてのみ見出されるのであって、富が社会的に交換されるという事実は、富を生産する労働の社会的関係の必然的帰結として歴史的な現象である。」（傍点は筆者）と。

これでは一般の学生、いわんや「労働者階級」にはとつき難いものとなるのではあるまいか。

勿論多くの学者はいわれるであろう。「専門の学問、研究は、新しい理論、新しい発見をするものであって、過去に築き上げられた色々な専門的理論法則等をふまえた上で進まなければならないのだから、表現がむずかしくなるのは当然なことである。問題はその表現が一般に理解して貰えるかどうかではなくして、新しく築きあげられた理論、法則が今後の人類社会の進歩発展に實際上役立つかどうかということである。」と。

科学、とくに自然科学の分野においては一層そういう傾向は強いであろう。しかし私は学生に教えるためにも、文章はでるだけ一般の人に分かりやすく書く努力をすべきであると考えている。

以上のような考え方で、これから勉強を続けて行きたいと思っっているので、遠慮のない批判を頂ければ幸いである。

貨幣とは何か

私の学生時代には大抵の先生が、まず最初に貨幣なら貨幣、金融なら金融の定義を述べて、そこから内容に入っていくという講義であった。最近でも貨幣論の本をみると、初めに「貨幣の本質」について書いてあるものが多い。ところがマルクスの「資本論」には貨幣の定義のようなものは書いてない。

河上肇氏は彼の「資本論入門」の中で次のように書いている。

「われわれは資本論の貨幣の章に貨幣に関する『凝固した定義』を見出すことはできない。その代りにわれわれは、商品流通の発展に伴い貨幣の諸機能が如何に発展するか、次第に発展していく商品流通という環境の中で貨幣の諸形態が如何に形成されていくか、ということの説明を見出すのである。」

そうして河上氏は次のようにも書いている。「われわれはこの章の全体を通じて、どこにも貨幣の定義らしいものを見出すことができないということは、ブルジョア経済学の教科書との対比において、本書の叙述法の一特色を成せるものである。」と。

しかし私は長い間の慣習か、初めでも終りでも好いから、そのテーマのまとめとして定義のようなものをまとめておくことが、自分自身のためにも便宜だと思うので、最初にとりあげることにしたわけである。

(しかしこれからの勉強の結果、また定義の書き直しをすることになるかも知れないが)

次に私の考えでは、学問・科学の勉強の最大の目的は、現在の時点で、あらゆる物の真理、法則を探求し、色々な技術を発明、発達させ、最大多数の人に最大の幸福をもたらすようにすることではないかと思う。

(自分の趣味で勉強することと好いという人は別として)

従って貨幣について勉強する場合も、重点は今日のわが国の経済社会で貨幣がどのような働きをしているか、今日の貨幣とはどんなものであるかを知ることにあると思う。

しかし現状を正しく知るためには一応過去の歴史の要点を知っておくことも必要であるから、以下今日までに多くの学者によって研究された貨幣の定義の主なものを見て行くこととしよう。

貨幣はいうまでもなく、他の多くの社会的諸現象と同じように、人間、人間社会の創り出した歴史的な所産であ

る。貨幣の歴史についても多くの学者によって研究されているが、人類がまだ非常に原始的であった紀元前数千年のいわゆる石器時代にすでに貨幣が使われていたといわれている。ただ初めの頃は勿論最近のような金属で作られた鑄貨とか、銀行券ではなく、貝とか、牛とか、皮とか、又は米とか、麦とか、茶、塩等の食料品が貨幣として使われていた地方もあった。

人間も勿論生物であり、動物の一種である。それは太古の時代から、今日まで変ることがなく、従って人間が生きて行くためには、いわゆる衣、食、住がまず必要である。そうして人間は万物の靈長といわれるように、次から次へと無限に欲望を持ち、珍しい物、新しい物を手にしようとする。そうしてそれを得るためには、どこへでも出かけ、新しい技術、新しい機械を発明する。それも太古から今日まで変らない人間の習性である。

(尤も人間は他方で斗争をし、戦争をして生産力を破壊し、殺しあいもして来たが、)

人間は当初原始共同体の初期には、自給自足、自分らで作ったり、とったりしたものだけで生活をして、他の共同体と物の交換をしていなかった時代があった。そういう時代には勿論貨幣はなかったわけである。ところが時代の進むにつれて、狩猟を中心に行っている共同体と、農業を中心に行っている共同体が接触し、各々自分の持っている物と相手の物とを交換しようとして、最初の間は物と物との交換(物々交換)をしていた。そういう物々交換が次第に頻繁になってくると、その間に、多くの人に必要で、しかも携帯や保存に便利な物が交換手段というか、今日という貨幣のようなものになって来たのである。

その後人間が金属を掘り出して使うようになってから、今度は金属(銅、銀、金)が他の物に代って貨幣として使われるようになった。その初めも今から四千年から六千年前のエジプト、バビロン、古代支那の時代といわれている。

以来今日まで人間社会の発展と共に貨幣の重要性は高くなり、今日の資本主義経済になってそれが最高の発展を示した。そうしてその時代、時代によって貨幣の働きは違ってくるが、その間に変わらない面がある。そのために同じ「貨幣」という言葉をつけられているのである。丁度家が太古の穴倉や、堀立小屋から、今日の立派な木造家屋、鉄筋コンクリートの家になっても同じ「家」という言葉で呼ばれているのと同様である。

しかし貨幣は家と違ってその定義は非常に難しく、マルクスは彼の著「経済学批判」の中で、多くの学説のあることを皮肉って次のように書いている。

「一八四四年および一八四五年のサー・ロバート・ピールの銀行条例に関する議会のある討議において、グラッドストーンは『恋愛ですら、貨幣の本質に関するせんさくほど多数の人々を愚物にはしなかった』といっている。」と。

それはともかく、今日までに唱えられた貨幣の定義の諸学説を大別してみると次の通りである。

一、貨幣商品説

貨幣商品説は貨幣学説の中でも最も古くから唱えられ、今日でも有力である。

ロッシャー氏 (Roscher) は彼の著書 “Grundlagen der National ökonomie” の中で次のように述べている。

「貨幣に関する誤った定義は、これを二つに大別することができる。一つは、貨幣を商品以上と解するものであり、他は商品以下とするものである。」と。

そうして彼は、貨幣が商品であり、商品でなければならない論拠として次のように述べている。

「貨幣の最も基本的な職能の一つは、貨幣が商品の価値尺度であるということである。貨幣が他の商品の価値尺度となるためには、当然貨幣自身も価値を持った商品でなければならない。それは丁度、物指しが自分で一定の長さを

持つていて始めて他の未知の長さを測ることができるのと同じことである。」と。

従つてこの商品説では、貨幣とはすべての商品の価値尺度となる一種の商品であるということになる。

マルクスの貨幣論も商品説ということができよう。(勿論その内容はロツシャールやその他の学者の商品説と非常に違つてゐるが)彼の著書「資本論」の中には次のように書かれてゐる。

「諸商品の全般的な交換が行われるためには、解決されなければならない問題が起り、それと同時に、その解決は唯一可能な、従つて必然的な方策としての、特殊な商品の貨幣への転形によつて実現される。従つて貨幣は商品世界の必然的な産物なのである。

貨幣はどうしてできたか。それはあらゆる商品が共同一致してある特定の商品を等価物とするから、それらの諸商品の共同的な働きかけによつて、その特定の商品がはじめて貨幣となるのである。だから『貨幣が商品であるということ』ははじめから分りきつたことだ。」と。

マルクスの学説をとつていふと思はれる麓健一氏は彼の著「金融および銀行の一般理論」の中で、貨幣について次のように書いてゐる。

「貨幣はまず商品である。その点ではあらゆる他の商品と異なるところがなく同じである。しかし、貨幣は他の商品一般と異なる特殊の商品である。すなわち他の商品一般と異り、貨幣は一般的等価物としての役割を独占的に果す。いかえれば、他のあらゆる商品の価値を独占的に表現する役割を果す特殊の商品である。あるいはまたより簡単に、貨幣はあらゆる商品の価値の体化物、すなわち価値の一般的な体化物であるともいふことができる。」

この商品説を人によつては素材価値説、金属主義学説とも呼んでゐる。

この商品説を主張する人々も、近世に入つて補助貨の流通が多くなり、更に進んで単なる紙片で作られた紙幣や銀

行券が一般的に使われるようになると、すべての貨幣が同じ価値を持った商品でなければならぬと主張することは出来なくなった。そこで補助貨や紙幣について次のような説明をしている。

「流通手段としての金は、初めのうちは普通の商品としての貴金属と同じように、交換の度毎に目方を秤られ、流通手段として特別の形態をもっていたものではなかった。しかしその後実際の取引の便宜のために、通貨(又は鑄貨)としての一定の姿をもたされるようになった。」

こうして金貨と金地金とは本来はただ形を異にするだけで、実質的には何の違いもなかったのであるが、金貨が流通しているうちに、自然に磨滅し、その金貨の表面に書いてあるだけの実価を持たないで、しかし通貨としては引続き同じ価値を持ったものとして通用する。こうして金よりも価値の少い銀、銅で作られた補助貨(名目貨幣)が金貨の代りの役割をするようになり、更に進んで紙片に過ぎない紙幣が金の代りに使われるようになるのである。」と。

二、名目主義学説

貨幣商品説に対して、貨幣はそれ自身は何等価値を持っておらず、ただ物に対する指図書であるとか、物に対する請求権であるという見方をここでは一括して名目主義ということとする。

この考え方も相当古くからあつて

アダム・スミスは「一ギニー金貨は近隣のすべての商人から若干量の必需品や便宜品を請求しうる手形と見なすことができる。」といっており、

ボードーという人は更にはっきりと「この流通場裡にある鑄貨は、人類の幸福と繁栄とを持ち来す有用で好ましい享樂品一般に対する有効な権利書に外ならない。それは為替手形の一種であり、あるいは持参人払の指図書であ

る。」といっておる。

この学説が貨幣論で非常に盛んになったのは今世紀に入ってからである。その一つの大きな契機となったのはクナップが一九〇四年に出版した「貨幣国定学説」の中で述べた国定説であった。

彼はその著書の冒頭で次のように書いている。

「貨幣は法制的創造物である。」と。

又

「貨幣は証券的支払手段である」ともいつている。

当時すでに多くの国では実際に鑄貨よりも不換紙幣とか、銀行券、預金通貨、為替手形などが多く使われており、従来盛んであった商品説では十分に説明することができないという人が多くなって来ていた。

そこでこのクナップの国定説の出現を契機として、その後この種の名目主義学説が次々に現れて来た。その主なものを二、三紹介してみると、ベンディクセンは次のようにいつている。

「貨幣の経済的本質は、前行給付によって得られた販売場裡にある消費できる生産物に対する請求権である。」

「貨幣は共同体のために行った給付を示す票券であり、すでに行われた給付に基いて反対給付を受ける権利である」と。

このような考え方であるから、彼の学説を貨幣票券説とも呼んでいる。

次に同じ票券説をとっているエルスターは次のようにいつている。

「現在の貨幣経済で、各経済主体が共同の所産である社会生産物に参与することのできる根拠、参与することのできる能力は、彼等がその社会生産物の構成に対して、何等かの貢献寄与をすることによって得られる。いわばその寄

与に対する報酬として共同体から与えられるのである。この社会生産物に対する参与能力と、その大きさを示すものは、各経済主体の持っている購買力、すなわち貨幣である。従って貨幣は社会生産物に対する参与能力である。

しかし単に抽象的な参与能力があるだけでは、まだその参与能力を実行することができない。そこでこの参与能力を実現し、実行することのできる手段がなければならない。

この社会生産物に対する参与手段となっているものが、今日われわれが普通に貨幣と呼んでいる鑄貨や紙幣等である。従って貨幣は又社会生産物に対する参与手段であるということが出来る。

次に今日の貨幣経済社会では、各経済主体の参与能力の大きさも、参与手段も、又参与の対象となる社会生産物も、すべて数字をもつていい現されている。その数的単位は抽象的な価値単位、あるいは価格単位であって、われわれはこれもまた貨幣と呼んでいる。そこで貨幣には社会生産物に対する参与測度Ⅱ参与の単位という第三の定義が与えられる。」と。

最後に貨幣を最も抽象的に、単なる計算単位に過ぎないと説く、リーフマンの説を紹介して名目主義の紹介を終ることとしよう。

リーフマンはいう。

「従来のあらゆる経済理論がそうであるように、貨幣理論もまた、一つの例外もなく全然物質的見方の上に立っている。すなわち貨幣は国家の発行したものか、あるいは国家によって認められた現実的な支払手段、換言すれば、種々の形態をした鑄貨、紙幣と考えられて来た。

ところが私の見解では、貨幣は国民経済の中にあって、流通を媒介するこのような現実的な支払手段の総体ではなく、貨幣は交換取引を行う人々が、効用と費用との比較を行い、又価格や所得がそれによって表現されるところの一

つの観念、一つの抽象物、すなわち一般的な計算単位である」と。

この名目主義学説は他にも色々あるが、すべて大同小異であるから、この程度で終ることとする。

結 論

以上今日までの貨幣学説の主なものを紹介して来たが、私は今日の段階では前者、すなわち商品説、金属主義の方が正しいのではないかと思っている。

私のいう今日の段階とは、私自身の研究がまだ十分とはいえないので、私の研究の今日までの結果ということと、もう一つは今日の経済が資本主義経済（私有財産制度を基盤にした貨幣経済社会、商品経済社会）である限りにおいてはという意味である。

貨幣のできた歴史を見ても、最初は米とか、貝とか、皮というようにすべてそれ自身が価値を持っている物であった。その後人間社会の生産力が発展すると共に、それに応じて交換経済も発展し、（その逆に交換経済の発展が、生産力の発展を促進した面もあった）貨幣も貝とか、皮というような物から、貨幣により適当な金属（金・銀・銅）が貨幣の中心となった。

その後封建時代になって貨幣の使用が次第に多くなると、藩主、大名等が経済的に困った場合、藩札等の今日でいう紙幣を発行するに至った。又商人は今日でいう為替手形を発行して、取引の決済を行うようになった。

資本主義経済になると、貨幣制度の中心は金であったが、日常の流通手段、支払手段としては、銀行券、預金通貨等が数量的には圧倒的に多く使われるようになった。特に戦争とか恐慌が始まると、金本位制度が維持できなくなり、銀行券も不換銀行券となったので、金属の貨幣は国内では全く使われなくなった。

このような変化を見て、一部の学者は先に述べた名目説を唱えることになったのである。

そもそも人間が貨幣を使うようになったのは、交換を容易にするためである。しかし同時にその貨幣は何時でも、何にでもかえることができなければすべての人にうけとられない。

交換、支払いを容易にするためという点に重点をおけば、金属の貨幣より、銀行券とか、預金通貨の方がはるかに便利である。銀行券、預金通貨が多く使われるようになったのはそのためであるが、しかし銀行券、預金通貨が貨幣に代って支障なく使われるためには、その銀行券、預金通貨が何時でもその持っている名目的な価値と大体同じ価値を持つ物にかえられると一般に考えられていなければならない。それを言葉を変えていえば、国とか、銀行とか、預金者の経済力が多数の人から信用されていなければならない。もし反対に国とか、銀行の信用がなくなれば、すべての人は銀行券や預金通貨を貰うことをいやがり、仮に手にすると直ぐに価値を持っている物に代えてしまおうであろう。

そのことは今日までの度々の恐慌、国際的なポンド危機・ドル危機でも実証されている。

従って今日でも貨幣は金属が基礎であり、他の銀行券、預金通貨等は貨幣の色々な機能の一部を代理している貨幣の代理物と理解すべきであろう。

そこで私は一部の学者が定義ずけているように、貨幣とその代理物とはつきりさせるために、呼称も、貨幣だけを貨幣といい、その代理物（あるいは代理物と貨幣を併せて）を通貨と呼ぶことにする。

以上で貨幣の定義についての解説を一応終ることとするが、貨幣をほんとうによく理解するためには、更に進んで、貨幣の機能、貨幣のはたらきを理解することが必要である。それは又稿を改めて書くことにする。

(以上)